

# 従軍文士の渡韓見聞録

——日清・日露戦争期の〈朝鮮〉表象と与謝野鉄幹「観戦詩人」——

中 根 隆 行

はじめに

文学研究では、「他者表象と文学」「戦争と文学」というテーマは、古典的な主題論研究の枠組みとして確立されている。けれども、明治時代の〈朝鮮〉表象について考える場合、この「文学」「他者表象」「戦争」という三つの鍵語に基づいたそれぞれの相関を問わなければならないだろう。それは、対韓外交史からみた明治という時代の流れが、征韓論にはじまり日本による韓国の植民地支配へと紐解かれる歴史でもあるからである。明治期の戦争と文化産業との関係について、木村毅氏は、西南戦争では新聞メディア、日清戦争では雑誌メディアが勃興し、日露戦争ではその双方が飛躍的に発展したことを戦争文学との関連から言及している<sup>1)</sup>。そして、この時期大量に編まれた朝鮮に関する言説——〈朝鮮〉情報群——は、征韓論・江華島事件から日清・日露戦争にいたる日韓近代史をめぐる重要事件の報道と密接に関係しており、そのなかで明治期の朝鮮に対する文化的イメージは形成されていったと考えられる。なおかつ、日清・日露戦争期には、新聞・雑誌メディア派遣の従軍記者とし

て戦場に赴くことを望む一群の文士が現れ、少なからず、そうした朝鮮像の伝播・更新に参与してゆくことになる。

本稿は、日清・日露戦争期の朝鮮人像と従軍文士の文学的営為との相関についての考察を試みる小考である。おもに一八八〇年代の知識人の朝鮮観について、上垣外憲一氏は、「日本人の朝鮮問題に対する考え方は、意外に多様性があり、単に侵略の対象、あるいは清国との覇権争奪の場としてしかこれを見ないといったものとはかなり隔たりがある」と述べ、そのような側面は多々認められるとしても、当時の知識人の朝鮮に対するあらゆる言説群が、「日韓併合」にいたる一枚岩的な歴史観に基づいた批判的解釈に褶曲されてしまう傾向を指摘している。本稿では、このような批判的解釈を可能にさせた原因のひとつを、明治期に形成された朝鮮の類型的なエスノロジー表象とその異文化像をア・プリオリに共有している言説群に求めたい。

日清・日露戦争は、帝国主義戦争あるいは植民地分割戦争としての性格を有していた。けれども、今日とは違い、当時は、帝国主義の標榜や植民地をもつということが、日本が西欧列強に比肩する一等国となるための手段として、積極的な意味合いを

伴つて語られる時代であつたことを忘れてはならないだろう。<sup>3)</sup>そして、文明開化や富国強兵という啓蒙思想のスローガンとともに語られた征韓論の時代からこの日清・日露戦争期にかけて、日本人の一般的な朝鮮観は、いわゆる文明国の範疇にそぐわないという文化的価値観による偏見を帯びたイメージで語られるようになったのだといえる。では、この時期の文学的営為の主体であつた文士たちは、その朝鮮の類型的なエスノロジー表象をいかに共有し、また、他者である朝鮮の人々をどのような動機から描いていったのであろうか。本稿では、近代戦争およびその戦場となつた朝鮮に思いを馳せた文士たちの文化的な記憶をめぐる他者への想像力と、日清・日露戦争期における〈朝鮮〉表象が文学作品に回収されるプロセスとの相関を、与謝野鉄幹「観戦詩人」をそのひとつの結節点として検証することを課題とする。

### 一、日清戦争期にいたる朝鮮人像の形成

日清戦争にいたるまでの明治期の〈朝鮮〉情報群に関しては、朴春日氏の指摘があるように、「<sup>2)</sup>征韓論」のふつとくに端を発する朝鮮地図、地誌、朝鮮案内書、朝鮮語学書などの刊行を経て、ついに朝鮮国内において自国の新聞を発行するまでその領域を広げ<sup>3)</sup>ていたと概観できる。この時期を彼は「千午事変を機に起こつた初の『朝鮮ブーム』」と銘名している。この「朝鮮ブーム」の内実に関する一例を挙げるならば、渡辺文京編『絵入朝鮮交報録』第五号には、「朝鮮は至る所皆楮裸山なり」

とか「我が北海道の野民支那台湾の生蕃と雖も蓋し朝鮮人の家屋に譲らざるべし」といった記述がなされる一方で、「東萊釜山近傍の人民ハ大抵鮮明なる衣服を着し僅にその風を乱ざるは我が人民の遠く及ばざる所なり<sup>5)</sup>」という対照的な記述も確認できる。それでは、日清戦争期のメディアによつて社会に流布されていた朝鮮人像とはいかなるものであつたのか。管見の限りでいえば、この時期の朝鮮人像の記述は、まずもつて文化的偏見に満ちたイメージで語られるという特徴が認められ、概してその形象も徐々に規格化されてゆく傾向にあつたといえる。その事例として、一八九四（明27）年七月に刊行された清水橘朗『朝鮮事情鶏の腸』（梅原出張店）と同年九月の『風俗画報』第七十七号の米山人「朝鮮人の風俗略解」における朝鮮人に関する形象描写を比較参照してみたい。

人民ハ一般に怠慢にして市中に入れば長煙管を口にして徘徊するもの多く又田舎に至れば冠帽を着け足袋を穿ちしまゝ耕作するもの少なからずといふ（清水橘朗、五四頁）

「朝鮮人の」性質は貴族も平民もをしなべて怠惰にして市中長煙管を口にし街頭を行くもの多く田舎の農夫は冠帽を頂き足袋を穿てるまゝ耕作せりたまゝ錢を得ることあるも更に之を貯ふるなく忽ち濫費して終生目前の計に逐はるゝなり（米山人、六頁）

『風俗画報』第七十七号には、名和永年による挿画〔無題〕

が米山人記事を視覚的に補完しており、また、第七十九号には、朝鮮各階級の典型的な人物像を詳解する大田才次郎「朝鮮の人物解」という紹介記事があり、名和永年の挿画への照会を付記している。もともと、この時期の『風俗画報』の内容と照らし合わせてみれば、朝鮮関係記事に割かれる誌面は、台湾のそれに比較すれば少ないといえる。だが、留意したいのは、引用二例における朝鮮人の形象がきわめて酷似しているという点である。この二例の照応を説明する妥当な根拠はない。しかしそれは、このような符合を生んでもおかしくないような朝鮮像の規格化が、「朝鮮ブーム」以来の「朝鮮」情報群の夥しい産出によつておこなわれていたと考えるてもよいだろう。また、日清戦争期の朝鮮人像の更新に関して一言すれば、たとえば、博文館の『日清戦争実記』には、その第一編から「内外彙報」に「◎朝鮮」欄が登場している。この「◎朝鮮」欄は、通編組まれていた常設欄ではないのだが、朝鮮に関する一般向けの紹介記事が目立つ雑報的な性格を帯びていた。周知のように、博文館の『日清戦争実記』は商業的に大成功を収めるのだが、こうした戦争実記ものに一喜一憂する読者がまた、朝鮮に対する情報群を日清戦争に纏わる知識として受容していったプロセスも看過できないだろう。そして、日清戦争によつてはじめて実際の朝鮮の地を踏んだ文士たちも、日本で流布する朝鮮および朝鮮人に関する類型的なイメージを共有していたと考えてよい。従軍記者として日清戦争を取材した松原岩五郎の『征塵余録』（民友社、一八九六年）には、すでに以下のような記述が見受けられる。

天性怠惰を以て有名なる朝鮮国人、世界中安逸を樂む亦韓人のごときはあらざるべし、彼等の平生たる其独り居る時は唯睡眠のみ、既に二人相寄れば冗談に時の遷るを知らず、三人集つて必ず手娯を始む。  
(四八頁)

「天性」「有名なる」といった言葉から推察できるのは、当時、こうした朝鮮人への差別的な言説群は珍しい事例ではなかったということである。つまり、朝鮮人一般に関する記述が「怠惰」といった形容をともなうて為されることが一般的な了解事項となつており、社会的に定着していたのである。そして開戦の前年に貧民街探訪の記念碑的ルポルタージュ「最暗黒之東京」を刊行したばかりの松原岩五郎が、直ちに「国民新聞」派遣の従軍記者として戦地に馳せ参じ、なおかつ、従軍記『征塵余録』において朝鮮の文化風俗を大幅に紙面を割いて詳述しているように、メディアによる戦争報道と派遣された従軍記者、そして朝鮮の記述との関係は密接に連関していたのだ。

日本がはじめて体験する近代戦争とそれを大々的に報道するメディアという枠組みのなかで、このような一般的な「朝鮮」表象の規格化がおこなわれていたという事実はあまり論じられてこなかった。だが、日本近代における朝鮮像が明治初期から日清戦争を経て規格化されゆくプロセスが、近代戦争という国家の一大事にあつて、大なり小なり世論の戦争に対する好奇心を煽りたてた新聞雑誌メディアによる流通網を媒介にして進行していたことは再度強調しておきたい。というのは、それがまた、のちの文学に描かれる異文化像の問題、すなわち、「朝鮮」

表象の受容に少なからず影響を与えているからである。

## 二、青年文士の従軍と見聞活写の素材

この時期、朝鮮を素描した文学作品には、東海散士「佳人之奇遇」や服部凶南「小説東学党」といった朝鮮体験者による政治小説があるのだが、ここで注目したいのは、日清戦争を直に観たいという文士の好奇心が、その戦場となった朝鮮の文化風俗をも詳述するプロセスである。日清戦争において戦地に派遣された新聞メディアの特派員は、全六十六社の内、記者一一四名、画工一名、写真師四名の計一二九名であったとされる。そのなかには、『国民新聞』では松原岩五郎のほかに国木田独歩、『郵便』報知新聞からは遅塚麗水、『日本』には正岡子規らの名が含まれていた。そのひとり遅塚麗水は、前川羊角とともに従軍記者として朝鮮に渡るよう杜より推薦された折のことを、『陣中日記』（春陽堂、一八九四年）に以下のように記している。

余は之を聴きて、初は大に喜び、而して終に憂へり、喜ぶものは未見の山河を踏みて、異殊の風俗を觀、而して一朝兩國干戈相見ゆるの日に当りては、觀光の客、復た筆を載せて軍旅の間に從ひ、豊公征韓後、五百年の壯觀を睹ることを得るに在り、憂ふるものは垂白の老母、堂に在り、誰れに頼りて甘脆の養を尽さん、〔……〕

(三頁)

ひとりの文士が従軍記者推薦の報に活氣立つ模様が綴られている右の一節は、戦争の血腥さに対する懼れや不安とはほど遠いところにあるといつてよい。紀行文をよくした遅塚麗水によるこの従軍記も、冒頭部に予告されているとおり、戦地で見聞した朝鮮の文化風俗を細部にわたって記述してゆく。彼が従軍に胸躍らせたのは、「未見」「異殊」なる朝鮮という風土をその眼で直に觀、また、彼の地での戦闘の實際を「豊公征韓」以来「五百年の壯觀」として眺めるその思い、すなわち、戦争そして異国の風土に対する好奇心に根ざしているのだ。これとほぼ同様の好奇心は、田山花袋の従軍願望にも窺える。「私は戦争を思ひ、平和を思ひ、砲烟の白く炸裂する野山を思つた。自分も行つて見たいと思つた。牙山の戦、京城仁川の占領、つゞいて平壤のあの大きな戦争が戦はれた。月の明るい夜に、十五夜の美しい夜に……」。実際に従軍をはたすか否かは別として、青年文士が日清戦争とその戦場となった朝鮮に思いを馳せるこのような事例は、戦地での戦況を随時正確に記録報道する従軍記者本来の職務とは、似て非なる何かがあつたように思われる。それは、文士が携わる文学的性分に由来しており、国家の命運を左右する近代戦争とその戦場となった朝鮮が、文士たちにとって是非とも観たい、そしてその光景を描きたいという見聞活写の素材として見出されていたのである。それは、いまひとりの青年文士と謝野鉄幹についても認められる性分であつた。

明治廿七年に自分は廿二歳であつたが、日清戦争が起つたので従軍したくてならなかつた。徴兵関係が要塞砲兵の予

備徴員として満一年間足止めされてゐたので行く事が出来ず、麗水君や子規君の従軍が窃に羨しかつた。それで戦争を題目にした詩や歌を自分の新聞に載せて慰めてゐた。自分が今日とちがひ戦争の讚美者であつた事は顧みて愧かしいが、当時の日本の環境に於て、ただ少年上りの空想に逸る無学な自分としては已むを得ない事であつた。

与謝野鉄幹が続けて回想するように、その当時は「博識な鷗外先生さへも独逸仕込の思想で、まだ其頃はクラウゼキッツの「戦論」を訳されたりする時代であつた」のだ。一端の文士となることを夢見て上京したばかりの血氣盛んな青年が、時を経ずして勃発した日清戦争の従軍記者として戦地に赴く他の文士を羨望すると同時に、彼の地でいまおこなわれているであろう戦争を想像し筆をもつて描くことによつて、はたされずにあるその思いを慰撫するという行為。それが、少なくとも日清戦争当時の文士をめぐるとつての側面を物語っていることは推察できる。だがしかし、ここで触れなければならないことは、その見果てぬ戦争に対して「空想に逸る」鉄幹青年が、その翌年朝鮮に渡つたのち、日本公使三浦梧楼の指揮のもと軍人や大陸浪人らによつておこなわれた閔妃虐殺事件の際に暗躍したとされる経緯である。

一八九五(明28)年四月、与謝野鉄幹は、落合直文の実弟鮎貝槐園の招請に応じて渡韓し、彼が塾長を務めていた京城の日本語学校乙未義塾の分校のひとつを任されることになる。のちに鉄幹は、槐園とともに日本領事館に仮寓し、そこで領事官補

の堀口九万一と親交を結び、同年七月に腸チフスを患い漢城病院に二ヶ月間入院したときに三人で企てたのが閔妃虐殺事件の発端であつたと語っている。前掲の引用には「戦争の讚美者であつた事は顧みて愧かしい」と自戒する箇所が見受けられるものの、殊この事件に関してだけは、「後の史家が日韓併合史を書く際に、かの事件が二三の氣を負ふ白面書生の幻想に本づく」と云ふ裏面の観察を等閑にしてはならないと思ふ」と書き記されている。

遅ればせながら渡韓をはたした与謝野鉄幹の従軍願望は、結局、その直前に発効された休戦条約によつて消尽する。しかし、その気概は、彼の志士的性格と相俟つて、閔妃虐殺事件での暗躍にとどまらず、広島召還直後の再度の渡韓においても、親日派の政府高官の勢力挽回のためにロシア公使館に移つた朝鮮国王の奪還を画策しようともしている。もとより、この朝鮮体験が、やがて「虎剣調」で知られる与謝野鉄幹に決定的な影響を与えた事実は周知のとおりだが、その後の彼が朝鮮をどのように描いたのかに関しては、まだ多くの課題が残されていると思われる。

### 三、文学における〈朝鮮〉表象 ——与謝野鉄幹「観戦詩人」——

与謝野鉄幹の〈朝鮮〉表象に刮目するのは、紋切り型の朝鮮像の形成、日清戦争に馳せた文士の従軍願望、そして実際の渡韓体験という上述の枠組みを踏まえて、〈朝鮮〉表象が文学作品に結実する典型的なプロセスを読みとるためである。一八九

七(明30)年からの第三回目の渡韓を経、「明星」を創刊して以降の与謝野鉄幹は、他方、朝鮮を描いた小説を二三発表しているのだが、そのなかのひとつに「観戦詩人」という作品がある。この小説は、日露戦争開戦の年である一九〇四(明37)年五月に、博文館の総合雑誌『太陽』誌上に発表された書き下ろし小説である。「観戦詩人」に関しては、管見の限り先行研究は皆無であるので、その発表当時『読売新聞』(一九〇四年五月二二日)に掲載された剣南「風頭語」による評を紹介しておきたい。

『観戦詩人』とハ、与謝野鉄幹子が、近刊太陽に掲げし小説、材を韓国に於ける子が実験視察の事象に取りて、之を時局に繋けたるもの、文体優雅にして詞章もまた高華に庶幾からんとす、小説としてハ脚色葛藤に乏しけれど、さながら実歴の日記にもおしたる譚として、余情あるを特色とすべし、鉄幹子、初め新体詩にて起ち、新派和歌にて成り、近日時に筆を散文に着く、子の多方面なるハ、人の知る所なれども、吾人の望む所ハ、その方面の広きに非ずして、寧ろその感情の熱烈なるに在り、子夫れ多きを求めずして、深きを得るに努むるハ、如何。

与謝野鉄幹「観戦詩人」は、一八九五年に渡韓したおりの経験を主とする三度にわたる朝鮮体験を素材にして、物語背景を日露戦争開戦時に照らし合わせて構成された作品である。この机上で構想された戦争小説は、日清戦争ではたせなかつた青年

時代の夢を、若き日の鉄幹とほぼ等身大の主人公に託した、朝鮮を舞台とする従軍詩人入江夏雄の物語として綴られている。以下に挙げるのは、その冒頭部分である。

この船の行先いそぐは、京城仁川の物の価、二月九日の開戦より以来、俄かに五倍七倍に騰れるを救はむがためと聞えしかば、白米、塩、酒、野菜、漬物、砂糖、さては蒲団、毛布類など、所狭きまで積荷したり。乗客には是等の荷主なるべし、大阪、福岡、長崎などの商人等、数多われは顔なり。外に新任の平壤郵便局長一人、軍吏三人、従軍記者七人、従軍俳優四人。われもまた唯だ一人の、名もおどろき観戦詩人として加はりつ。

〔「太陽」第十卷第七号、九七頁〕

この船内描写には、日本の兵站基地となつた朝鮮に赴く乗客たちの意気揚々とした情景が綴られている。すでに述べたように、日露戦争とは、韓国および満洲での利権をめぐる日本とロシアの帝国主義戦争であつた。帝国主義とは、いうまでもなく領土的拡張の論理である。この視点からすれば、「観戦詩人」冒頭部での渡韓途上の船内は、日本の商業資本が朝鮮に拡張してゆく交通の場であることが活写されているといえるだろう。<sup>13)</sup>

そして、詩人として従軍する入江夏雄もまた、「われは顔なり」とされる乗客のひとつであるのだ。すなわち、従軍詩人入江夏雄の物語は、朝鮮という未知なる風土をその文学的素材として蒐集する拡張の物語であることが、ここで語られているのである。そこでまず、「観戦詩人」における朝鮮人の描かれ方に関

して考察する。

この国の賤しき者ども、人々の手荷物担はむと争ひ罵るさま、昔の歌に韓さへつりと云ひけむ、げに詞も分き難く、いと見ぐるし。海岸には日本憲兵あまた行きかひたり。この国の巡査の三稜形の帽かぶりたるもまじれど、顔つき何れも分別足らず、薄き顎髭など、今の世紀の人種とも覚えざり。況してこの国の民の立居長閑なる服装して、三尺の煙管咬へありく打見は、宛ら文人画の中の人なり。

(九七—九八頁)

引用は、仁川港投錨後に主人公がはじめて出会った朝鮮人の素描である。まづもって強調したいのは、この文学作品の場合にも、規格化された朝鮮人像がそう大差なく受け継がれている、ということにある。前述できなかつた指摘を付け加えれば、「今の世紀の人種とも覚えざり」という朝鮮人巡査の形容に窺えるように、日本人一般と比較対照することによって成立するこうした形象には、明らかに文化的な意味合いにおいて「人種」の一語が使用される傾向にあったといえる。さらにいえば、居留地の「日本人街」に比して描かれる「韓人街」の比喩には、「穢多村」や「阿弗利加」といった語が選ばれる事例も同様である。「街とは名のみ、宛ら我國の穢多村など云ふ忌はしきさまに似たり。獣の肉を鬻ぐ店ぞ先づ目に入る」(九九頁)。これまで本稿が紋切り型の朝鮮人像として提示してきたのは、おもに社会的下層に属する人々であったのだが、そうした形象が、日本における被差別部落の人々に対する社会的なイメージを踏襲して

素描されるのも、また通例であつたといえる。このような朝鮮人のエスノロジー表象は、そこに書き手が日本の被差別部落像を連想することによって画定される傾向があつたのだ。こうした形象描写の重ね書きには、二重三重の差別化がはかられていることはいうまでもない。

もとより、絵入読本や紀行文・従軍記にみられた典型的な朝鮮像が、同様に文学作品に受容されているからといって、それを直ちに文学における〈朝鮮〉表象だとするのは早計である。重要であるのは、この作品におけるその表象の力学が、物語構造にいかなる効果を供与することになるのかという点にある。

「観戦詩人」は、従軍詩人として渡韓した入江夏雄が、彼と比肩する文学的教養と愛国心とを併せもっている香坂副領事と親交を結び、二人がともに韓国の外部大臣「李祉鎔」(李址鎔、以下の表記は原文に従う)の娘に恋をするという内容となっている。入江夏雄がその女性に一目惚れをする場面は李祉鎔主催の夜会に設定されており、その舞台背景には、日韓議定書の調印からのちの第一次日韓協約へという対韓外交の一連の流れが複線となつて提示されている。物語の後半部はこうである。やがて鴨緑江の戦いに乗じて平壤に向かつた入江夏雄は、市街地での戦闘に遭遇、偶然そこで負傷した香坂副領事と再会をはたし、野戦病院にて李祉鎔の娘への恋心を告白される。そして、入江夏雄は、みずからの思いは黙して語らず、その翌日、死を覚悟してであろうか、志願して騎兵隊に随行し戦闘の最前線に赴くという結末となる。

このような「観戦詩人」の物語内容は、のちに朝鮮の宗主国

となる日本人男性である詩人と外交官が、のちに植民地支配を受けることになる朝鮮人女性を領有せんとする物語、というさらなる解釈が可能である。いわゆる植民地文学における征服の図式は、支配者の男性による被支配者の女性の性的所有という比喩的枠組みで語られることが多い。<sup>15)</sup>この作品の場合は、李社鎔の娘と二人の日本人男性との間に性的関係は認められないものの、彼女は、日本留学経験者で東京永田町の華族女学校を卒業した女性として造型されており、夜会では通訳を兼ねている。さらにいえば、入江夏雄と香坂副領事は、学生時代に彼女に瓜二つのおそらく同一人物であろう華族女学校の日本人女学生に思いを寄せていた過去があるという。この点、蛇足にすぎない感はあるが、確認したいのは、おもに言語の非共有性を中心とする日本と朝鮮の文化的差異が、彼女の存在によって埋められているという点にある。入江夏雄の吟じる詩の真意をまず押し量ることができるのは、香坂副領事とほかならぬ彼女であるのだ。

与謝野鉄幹の戦争小説「観戦詩人」に注目するのは、朝鮮人女性をめぐる二人の日本人男性という三角関係をもつて、やがての日本による植民地支配の力学を描いているからである。「観戦詩人」における〈朝鮮〉表象の受容は、このような植民地文学として読解可能な物語内容のなかに、紋切り型の朝鮮人像による描写が配置されることよって成立しているのだといえる。すなわち、主人公がはじめて見た「この国の賤しき者ども」を「いと見ぐるし」と語りながらも、なおかつ、そうした風景を入念に活写することは、その対極的な場面、「わが魂は奪は

れぬ」と語られる豪華絢爛な外部大臣の夜会において日本の華族出身者に比すべき貴顕の朝鮮人女性に恋をするという、そのメインプロットの物語的効果を逆に際立たせる結果となるのである。このようにして、のちの征服のシナリオを登場人物のセクシュアリティによって隠喩的に描く「観戦詩人」は、朝鮮人登場人物が日本人登場人物によって語りかけられる対象として造型され、また、言葉語るべき内面をもつということが可能にした物語となる。<sup>16)</sup>この小説では、その主体を有する朝鮮人登場人物は、第一に外部大臣李社鎔であり、それを媒介するのが李社鎔の娘である。つまり、日清戦争期の従軍文士のルポルタージュによる〈朝鮮〉表象から、その枠組みを物語化した「観戦詩人」という文学作品への移行は、描かれた朝鮮人が日本語による言語の共有によって主体性を賦与されるといふプロセスでもあるのだ。もとより、こうした内面性を有する朝鮮人登場人物は、日本的文明観への同化というイデオロギーを代弁する存在として造型されていることは否めない。

#### 四、近代戦争とそれを語りうる文士の資格

与謝野鉄幹「観戦詩人」には、日清戦争期に社会に流布していた朝鮮人像が文学表象として受容されていた。そこに凝縮して織り込まれていた〈朝鮮〉表象の地政学的な配置は、日本における植民地文学の揺籃期という観点からしてもきわめて重要であると思われる。だが、それは決して与謝野鉄幹ひとりに限られる問題ではない。そこで課題となるのは、このような表象



の力学が日露戦争期に成立したという根拠を、同時代の文学として文化のなかに求めてゆくという作業である。ここではそれを、近代戦争とそれを語る文士との関係から考察してみたい。以下にあげるのは、「観戦詩人」の夜会の場面における李杜鎔の言葉である。

入江公よ、幣国の山河は如此くに荒涼なるも、君が詩は瓦を化して黄金となすの術あらむ。願はくは今や幣国の民の貴国に信頼するの至誠をも併せ歌ひて、帰りに貴国の大皇帝陛下に献じ奉れ。幣国の気候は険悪なり、千金の身を自愛せむことを祈る。(一〇八頁)

「千金の身」という比喩に示されているように、入江夏雄は特権的な存在として措定されている。それは、彼がほかならぬ詩人だからである。「美はしき歌と文を作る人」(九九頁)とも記される彼は、引用にあるとおり、「瓦を化して黄金となす」ような言葉の錬金的な資質をもつ者として定義づけられている。つまり、入江夏雄にかかるなら、「仁川の酌婦をも天女の如くに」(一〇一頁)描かれるというわけである。それでは、このような特権的属性を有している入江夏雄は、なぜ、従軍詩人として渡韓したのであろうか。これと同様の香坂副領事の問いかけに、彼は、次のように答えている。

われ、然か問ひ給ふこそ嬉しけれ。多くの批評家は戦争文学を促しぬ。戦争文学とは何の意ぞや。彼の戦争小説、征

露唱歌のたぐひを謂ふとならば、戦争文学は今まさに盛りなり。耳も心も鈍きわれは、斯かる時、号外売りの声に合せて、逸早く調べ出づる技術を知らず。「……」たゞ想ひ給へ、われは遽に光なき土窖に閉ぢらる身と成りぬ。あゝその寂しきは、若き人の身に仮りのひと日だに堪へらるべしや。わがために、わが本国は土窖なり。こゝに偶ま戦争といふ窓を見出でつ。われはこの窓の血に瀆れたるを嫌ふの邊なし。たゞこの窓によりて、再び彼の天を窺ふの幸ひあれと祈るのみ。(一一二頁)

ここには、与謝野鉄幹が感得した日露戦争期における文学状況を参照すれば、戦時において「世にもてはやさるゝは、軍歌、戦争小説、戦争実記の類にして、書肆は、他の著述を出版することを見合はせ、甚しきは、書肆にして其業を廢するものあり」というのが現状であったという。もとより、「観戦詩人」がそのような「戦争小説」であるというのは事実だとしても、入江夏雄の造型は、戦時の文壇で流行りの戦争ものという商品的差異を打ち出せずにいた文士のひとりとして設定されているのである。そこで、留意したいのは、引用後半部にある近代戦争と国家に対する詩人のあり方に関してである。「わがために、わが本国は土窖なり」以下の箇所から窺えるのは、日露戦争の開戦で不遇に処した入江夏雄にとって、その身上から脱却する糸口が従軍するという行為によって見出されていることである。また、前掲の引用と併せて考えるのであれば、この箇所には、

国家を代弁する存在が詩人であるという解釈もまた成立しうることに注意しなければならない。問題なのは、「観戦詩人」にみられるこのような文士像が、日露戦争期の文壇において、どの程度共有されていたのかという点である。

そこで注目したいのは、一九〇四（明37）年、『文芸倶楽部』誌上に開設された「文士の戦争観」欄である。第一回の坪内逍遙、幸田露伴、姉崎正治にはじまり、都合六回にわたって続いたこの新連載は、合計十七名の文士による戦争観を掲載しており、この時期圧巻である。もとより、それらの「戦争観」に各種各様の感は拭えないのだが、ある程度諸氏に共通する留意事項となっているのは、文士が語る戦争文学一般に関する意見である。その戦争文学をめぐる議論に関しては、以下の幸田露伴の一節（「外交と囲碁」、第十卷第九号）に借覧するのが妥当と思われる。

「……」作者が従軍でもして征露の苦楚を嘗めて、戦場の惨憺たる光景を目撃して書いた所が、只作者自身の眼識を博くしたと云ふにとどまつて、それを詩材にして傑作が出るかと思ふと、それは作者本具の才能によることですから頗る疑問です。文学者は仙人でも困りますが、提灯屋になつて貰つても有りがたくありません。（一九七頁）

文士が近代戦争を観戦しそれを描くという行為が全き文学的営為に直結するということは、「作者本具の才能」に依拠するとされている。如上、当時流行りの戦争文学一般に対する幸田

露伴の所見は、その参与の度合いによつてはかられることとなる。文中の「仙人」あるいは「提灯屋」と評される対照的な比喩は、文士がそれに無関心にすぎるとも、また、焦慮するあまり商業主義的迎合と大同小異とされるのも、大差なしとする判断からであろう。この露伴の考えを敷衍すれば、日露戦争という国家の一大事に臨む文士の社会的職能は、戦争文学の流行に処する文士それぞれの素材論的選択に看取することができる。だが、「文士の戦争観」欄でより通有であるのは、戦場を直接視察しそれを活写するという行為じたいが、文士そのものの資格を問うのだとする考え方である。たとえば、広津柳浪は、「吾々日本文学者が今日の境遇からして、三百円なり四百円なりの私財を投じ従軍すると云ふ事も出来ないですから、到底会心の作は得られんので」と胸算用しながら、博文館の写真班随行員として従軍をはした田山花袋に対して、「この「單純」を補ふのに「戦争」を以てしたと云ふのは極めて妙で、今後同氏の書かれる小説は、屹度新生面を開かれるだらうと思ふ」と述べている。読みとらなければならないのは、花袋の従軍体験がやがての「新生面」を保証するという見解の裏面に、望めども従軍の機会に恵まれずにいた一群の文士たちの存在があったということである。

こうした従軍文士に寄せる羨望をはじめとする戦争観は、ある一点において共通していると思われる。それは、文士であるか否かに関わらずとも、戦争を具に観る従軍体験こそが文学を生むのだという見地である。「観戦詩人」の入江夏雄がそうであったように、日露戦争は、新たな文学的営為をはらむ一血

に瀆れたる」「窓」として認知されていたのだ。それに関して、上田敏（『好戦論者と不好戦論者』、第十卷第十二号）は、以下のように述べている。

「……」今度の戦争のやうな事があると、始めて文学の眞価が現はれて来る。それは軍人の通信や、公報に中々名文がある。文士と雖も得て及ばざる底のものがある。軍人をしてこれだけの文を綴らせる根本は何であるかと云へば、文学でせう。

（一七一頁）

この「文学」の一語が、「名文」や美文といった一般的な使用法にのみ依拠しないことは了承できるだろう。すなわち、ここで上田敏がいわんとするのは、文学が戦争を語るのではなく、戦争がそれを語る文学を生むのだという一点に尽きている。これについては、「文士といふ資格」が自分にあるか否かは「怪しい」としながらも、「平生筆を執て世に立ち、シカも今度は遼陽まで戦争見物に往て、血河屍山の大修羅場を見て来たのだから、一番臆面無しに、文士の戦争観を語る仲間入りをしませう」（『戦争と文学美術の調和』、第十卷第十五号、一六一—一六二頁）と述べる坪谷水哉を参照したい。たとえば、彼はその理由に関して、「戦地では従来世に在りふれたる題目の外に詩にすべく、画にすべく、小説にすべく、以て国民の元気を鼓舞し、以て出征将卒の功績を不朽にすべく絶好題目は限りなくある」（一六四頁）と述べている。この水哉の経験論的な見方を肯つているのは、実体験による文学的素材の蒐集なのである。つま

り、こうした事例に窺えるのは、「戦争観」の奇妙な転倒であるのだ。そして、上田敏のいう「軍人」が文士顔負けの「名文」を綴るといふ事例は、実際、日露戦争後に上梓され「天覧」の称号を得、のちに国民的な戦争文学となった桜井忠温『肉弾』の実践を想起させる。その「第一戦友の血塊」で桜井忠温は、日露大戦争記は「史家、文豪の靈妙なる筆を就うて始めて成るべきものである」のだが、「一個微小の軍人」である自分が敢えてこれを編んだのは、「剣執る手の柄にも無き筆を呵して、此難戦についての国民の記憶を新にしたい」からであると語っている。このように、近代戦争への参与が文学的営為を可能ならしめ、「国民」に語るべき資格を得るのだという認識の醸成は、ある意味では、当時の文学界のみならず、より広い一般的な了解事項となっていたことが推察できる。さらにいえば、こうした見方には、桜井忠温『肉弾』のような帰還兵士による従軍体験の特権化にいたるとき、戦争を表象するべき「文士」という主体や作家が書くものとされてきた「文学」という制度そのものを脱構築する転倒の論理を秘めていたともいえるだろう。

### おわりに

これまで考察してきたように、日清・日露戦争期の青年文士たちは、それまでに形成されていた朝鮮の紋切り型な文化的イメージを共有していたと考えられ、そのなかで実際に渡韓した者は、少なくとも、朝鮮での体験を活字化することによって、朝鮮人像の社会的なレベルでの伝播・更新を担ったということ

になる。もちろん、そのなかには、朝鮮との外交問題に対する政治的発言を行った者もあった。だが、より強調すべきなのは、この異文化像の伝播・更新にはたした役割ではないだろうか。渡韓文士たちにとつての朝鮮とは、近代戦争の場として見出された未知なる見聞活写の素材としてあったのだ。その異文化の風景は、近代戦争に思いを馳せる二次的派生物としてあり、それゆえに、まづもつて好奇心が先立ったのだと考えられる。そして、彼らによる〈朝鮮〉情報群は、世人の注目することとなった過熱する新聞・雑誌メディアの戦争報道のなかで、読者に一般的な朝鮮像をより強固なものとして提示し、新たに植え付けていったのである。

また、その一方で、日清戦争から日露戦争へと流れは、渡韓文士たちの紀行文・従軍記といったルポルタージュと与謝野鉄幹「観戦詩人」にみたような戦争小説の間のジャンルの接近をもたらし、それによって類型化した朝鮮のエスノロジ―表象を文学作品のなかに移植させたプロセスでもあったのだ。この戦争小説が日清戦争直後からの三度にわたる朝鮮体験を日露戦争時の時局に合わせた机上の従軍文士の物語であることは、この意味で興味深い成立事情といえるだろう。その「観戦詩人」では、〈朝鮮〉表象の地政学的な配置による物語的激化の振幅を高める効果とともに、それまでのルポルタージュとは明らかに異質な、二人の日本人男性と朝鮮人女性との三角関係をメインプロットとする植民地文学的な物語構成、そして、貴頭の朝鮮人登場人物の語るべき内面を仮構するという試みが為されていたのである。

そして、こうした渡韓文士によるルポルタージュから従軍文士の物語「観戦詩人」へとというプロセスは、この時代における戦争と文学的営為をめぐるある共通認識の醸成と不可分の関係にあったのである。それは、日清戦争期の青年文士の従軍願望として現れ、日露戦争期にいたつてより広く認識されることとなった、近代戦争を直接体験することがそれを語るべき文学を生むのだという経験論的な考え方である。もとより、こうした認識の醸成は、ある程度の広がりをもつていたとはいえず、当時の文学界のひとつの側面を物語っているにすぎないのかもしれない。しかし、このような文士の戦争観を検証する場合、そこで論議されることのない「他者表象」との相関を看過すべきではないだろう。それは、朝鮮のエスノロジ―表象という観点からいえば、当時語られることがないほどに自明視され、共有された文化的な記憶としてあったのであり、現在それじたいが問題となっているからである。

注

- (1) 木村毅「解題——日本戦争文学大観——」〔明治文学全集97 明治戦争文学集〕、筑摩書房、一九六九年。
- (2) 上垣外憲二「明治前期日本人の朝鮮観」〔日本研究〕第十一集、一九九四年、四二頁。
- (3) 三谷憲正「『太陽』における〈朝鮮観〉——ある〈奇妙な情熱〉について——」〔日本研究〕第十七集、一九九八年）では、当時の朝鮮に対する知識人の言説群を「奇妙な情熱」と称して詳細に論じている。また、周知のように、こうした言説群への批判は幸徳秋水や木下尚江ら社会主義者によつて為されていたのだが、本稿との関わりについては稿を改めて論じたい。

(4) 朴春日『近代日本文学における朝鮮像』増補版、未来社、一九八五年、三三二頁。また、この時代の朝鮮観に関しては、旗田巍「日本人の朝鮮観」(日本と朝鮮)、勁草書房、一九六五年、や岡野幸江「木下尚江と朝鮮」(社会文学)、第一号、一九八七年)、朝鮮像の形成に關しては、木村幹「不潔」と「恐れ」——文学者に見る日本人の韓国イメージ——(『近代日本のアジア観』、ミネルヴァ書房、一九九八年)、等を参照。

(5) 渡辺文京編「絵入朝鮮交報録」第五号、一八八五年、五一—六頁。

(6) 『日清戦争実記』第一編(一八九五年二月、二四版)は、「口絵」本紀「文苑」内外彙報で構成され、「内外彙報」が「◎日本」◎支那「◎朝鮮」各欄という細目となっている。この「◎朝鮮」欄は、たとえば第五編(一八九四年十月、初版)の「官妓八十人の注文」にみられるような記事も掲載されるようになる。また、こうした雑誌構成は、「日露戦争実記」でも踏襲される。

(7) 全日本新聞連盟編纂『日本新聞大観』第三集、三七〇頁の記述による。

(8) 田山花袋「明治大正文学回想集成? 東京の三十年」、日本図書センター、一九八三年、九一—九二頁。

(9) 与謝野鉄幹「沙上の言葉(四)」『明星』第五卷五号、一九二四年十月、一三三—一三四頁。

(10) 前掲注(9)同上、一三四頁。

(11) 関良一「乙未の変と鉄幹」(『国文学』第九卷第十五号、一九六四年十二月)や針生一郎「明治浪漫主義における自我と国家——与謝野鉄幹・晶子の抒情について——」(『季刊三千里』第七号、一九七六年)、松野秀子「与謝野鉄幹と朝鮮」(『季刊三千里』第二十八号、一九八一年)がこのあたりを論じている。

(12) 朝鮮に関する小説としては、他に「開戦」(『第二明星』第一号、一九〇二年一月)や、「小刺客」(『第二明星』第四号、一九〇二年四月)がある。また、これらに關しては前掲の松野論文が詳しい。

(13) 日露戦争期になると、こうした日本の商業資本のみに限らず、一般の朝鮮渡航者数が増加したという。『読売新聞』(一九〇四年五月五

日)は、その渡航者の多くが「無資無産の者共にて、渡航早々糊口に窮し、路頭に迷ふ有様」だとし、門司や長崎では乗船時に警官による渡航差止めまで行われていることを伝えている(「朝鮮渡航者に就て」)。

(14) 与謝野鉄幹「観戦詩人」には、この李址鎔(李祉鎔)をはじめとして、伊藤博文や林権助といった実在の人物が多く登場しており、いわば政治小説的な傾向を帯びているともいえる。

(15) こうした見方に関しては、理論的な枠組みというよりも、日露戦争当時の知識人の言説に端的に窺える。たとえば、「文芸倶楽部」第十卷第五号掲載の桂浜月下漁郎(大月桂月)「時文」には以下のような記述がある。「近頃、貴国は、我國と日韓条約を結ぶ。是に於て貴国は、また他の強者の鼻息を伺ふを要せざるべし。譬ふれば、醜業婦が数多き大尽の中にて、最も働あり、且つ実意ある人を選び、その妾となりたるが如し。醜業婦の境遇に比すれば、一步進みたるものなれど、なほ日蔭者の身の上也、世間へは顔出しが出来ざるもの也。何ぞ更に進んで、籍を入れて、本妻とならざる」(韓国に檄す)、一七九頁。

(16) このような「観戦詩人」の思想の原型は、与謝野鉄幹の乙未義塾での朝鮮人学生に対する日本語教育実践の経緯に求められるだろう。これに關しては、『東西南北』の「廿八年の春、槐園、朝鮮政府と議して、乙未義塾を京城に創す。本校の外、分校を城内の五箇所に設け、生徒の総数、七百に上る。高麗民族に日本文典を授け、兼ねて、日本唱歌を歌はしめたるが如きハ、特に、槐園と余とを以て嚆矢とする也。開校の始め、余の歌に云く。／＼から山に、桜を植ゑて、から人に、やまと男子の、歌うたはせむ」(『明治文学全集51与謝野鉄幹と謝野晶子集』、筑摩書房、一九六八年、一八一—一九頁)という箇所が参考になる。

(17) 大町桂月「文芸時評」『太陽』第十卷第五号、一九〇四年、一五四—一五五頁。

(18) 「文士の戦争観」欄は、「文芸倶楽部」第十卷第九号(一九〇四年七月)より連載開始。執筆者に關しては以下のとおりである。坪内

逍遙、幸田露伴、柿崎正治／依田学海、広津柳浪、某博士／塚原洪  
柿、上田敏、江見水蔭、寺崎広業／高田早苗、渥塚麗水、戸張竹風  
／内藤鳴雪、松居松風、新田静湾（以上、掲載順）。

(19) 広津柳浪「社会主義と際物文学」、『文芸倶楽部』第十卷十一号、一  
九七頁。因みに同誌第十卷七号の大町桂月「時文」には、「これ迄、  
花袋の小説は、青年の男女の可憐なる恋愛を描くに長ぜり。従つて  
優婉の趣は得たれど、豪壯の趣は得ざりしが如し。今や千里際涯な  
き満州の野に行き、世に稀なる大戦争を目撃す。花袋の筆致、今  
後、一大変化を来すものあらむ乎」（人さまへ）、一七〇頁）とあ  
る。

(20) 桜井忠温「肉弾」『明治文学全集97 明治戦争文学集』、筑摩書房、  
一九六九年、五頁。

(なかね たかゆき 筑波大学大学院博士課程 文芸・言語研究科 文学)